

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】安納 真理子

【所属】(助成決定時)東京芸術大学大学院博士後期課程、音楽文化学専攻(音楽学)

【研究題目】英語能の創作と上演環境に関する研究

【研究の目的】

現在、能(古典能)に対する国際的な関心は高い。それは、能が2001年にユネスコの無形文化遺産として宣言されたことに加え、600余年の間伝承されてきた歴史の長さや武士の式楽であったことなどが関係していると思われる。能を研究しに来日する外国人が主催する日米両国での能の公演、実技のワークショップ、新作能の書き方に関する劇作家向けの研修などに参加する人も多くなった。この新作能のワークショップにより、英語能の作品数も多くなった。

英語能は、日本の伝統芸能の能の構造・形式、音楽の手法を用い、英語で上演する能を指す。本研究では、英語能の創作と、その上演環境に関する研究である。英語能の作家には能の背景がない人もいるため、英語能の謡や囃子のリズム関係を理解していないこともある。作家、作曲家、囃子方、演者の専門知識の度合いや、作品に関わる人々の組み合わせにより、様々な英語能の形が生まれる。本研究では、英語能が舞台上で上演される前の段階で生まれる、作家、作曲家、囃子方、演者のコラボレーションを見ながら、英語能の創作過程やそれを取り巻く上演環境を追求した。

【研究の内容・方法】

英語能は、まだ新しいジャンルであるため、分類や演劇としての位置付けが明確にされていない。英語能は、古典能、新作能、その他の芸術(映画、演劇、作曲、舞踊)から様々な影響を受けていることが、その分類や位置付けをより複雑にしている。報告者は、古典能の構造と囃子の手や旋律を土台とする、「能に影響を受けた」英語能を対象とした。この対象となる英語能の上演する団体は二つある。それは、①リチャード・エマートによる「シアター能楽」と、②ジョナ・サルズと茂山あきらが結成した京都の「能法劇団」である。

英語能では、創作の前段階での作家、作曲家、囃子方、演者の交流過程がそれぞれの作品の構造、音楽、謡と囃子のリズムに重要な影響があると考えられる。本研究では、これらの二つの団体の①楽譜や映像を使った音楽分析によって謡と囃子のリズムを明らかにし、②それらと創作過程との関係を現場調査とインタビューにより明らかにした。②では、1)英語能における作家、作曲家、囃子方、演者の交流プロセスの実態を検証し、2)団員のほぼ全てが演劇の人で構成されている英語能の団体が、新しい作品をどのように受け止め、どのように習得するのかを明確にした。この調査は、以下の二つを対象に調査を進めた。

(1)2011年6月-7月:東京(6月28日)、京都(6月30日)、北京(7月4日)と香港(7月6日)における「シアター能楽」の英語能<パゴダ>の上演

<パゴダ>は、中国系イギリス人の作家のジャネット・チョングが、亡くなった父親の故郷である中国を訪れた時の経験を、能の構造を用いて語った作品である。喜多流能楽師の大島家と「シアター能楽」とが、2009年12月にヨーロッパツアー(ロンドン、ダブリン、オックスフォード、パリ)で初演した。報告者が調査した2011年6月と7月におけるアジアツアーでは、2009年の<パゴダ>の形と多少異なった形で再演された。この英語能<パゴダ>のアジアツアーの上演では、<パゴダ>を鑑賞するだけでなく、作家のチョング、大島家とシアター能楽の上演前と上演中に行われるリハーサルや密接な交流プロセスとやり取りを見ることができた。さらに、現地における能のワークショップにも出席することができ、能の団体と現地人との交流も観察することができた。

(2)京都の「能法劇団」の作品調査

京都で「能法劇団」の先頭に立つサルズにインタビューをし、資料収集をした。また、団体の 30 年記念上演を京都の大江能楽堂でみ(2011 年 7 月 18 日)、現在における作品を把握することができた。これにより、能法劇団が、1981 年に初めて上演した英語能<鷹の井>と異なり、日本語と英語のフュージョン作品やバイリンガル狂言作品を多く上演していることがわかった。

【結論・考察】

本研究は、英語能の上演環境をみることによって、多くの英語能には古典能と異なり、演出家が置かれていることがわかった。この演出家が試行錯誤を重ね、英語能に対する観客の反応を考慮しながら、作品の余分な部分を削ぎ落とし、次の舞台に向けて構造を変える自由があることが明らかになった。この自由により、英語能は古典能のように洗練された舞台となっていくのである。だが、英語能は、この自由度があるなかでも、やはり、古典能の要素が顕著であり、構造、音楽、謡と囃子との関係などに、その影響が強く表れていた。

英語能は、主に英語圏や英語が理解できる観客を想定して作られていることが明らかとなった。総合芸術である能のもつ視覚的な美、音楽的な美、所作の美などに、英語能は言語の美や新しい作曲を加え、観客が興味を持つ刺激的な題材や人間が共感できるリアルな題材を用いて、人々の心を動かす舞台を作ることができる。また、英語能は、他の国の人々が自分たちの言語で能を作るきっかけともなり、「国境を越えた芸能」として能の国際化を促進することができるだろう。

